

絵本で考えるデス・エデュケーション

木村敦子

(大学院生)

人生の旅において人はさまざまな出会い、そしてまた、自然、絵画、音楽、本などに心揺さぶられる経験がありましよう。

私は、死生学者であるアルフォンス・デーケン氏のアシスタントを長らく務めてきました。死生学とは、文字通り「死」と「生」を、医学、文学、歴史学など多角的な観点から研究する学問のことです。その死生学を基礎とした教育が、デス・エデュケーションです。教育の範囲は、「いのち」の始まりから終わり、死別による悲嘆からの立ち直りを含む、広く深いものです。死を見つめることを通して、どう生きるかを考え、いのちの大切さを学ぶ

教育です。

絵本との出会い

子どもに死を教えようと考えるとき、どうすればよいだろうか、と戸惑われるのではないだろうか。

災害や事故による死者のニュース、近親者やペットの死など、死は身近にあります。子どもに「死ってなあに？」と問われるときが必ずあると思われます。そして、そのときこそ、死を教えるよい教育の機会であり、問われたときに話をそらすと、子どもは死について二度と口に出さず、タブーな言葉だと知る、

木村敦子（きむら あつこ）
 広島大学大学院文学研究科人文学専攻。上智大学名誉教授 Alfons Deeken 元アシスタント。定年退職後、お茶の水女子大学 ECCELL 社会人プログラムで学ぶ。

とデーケンは説いています^{注1}。しかしながら、子どもが問いを発するまで、準備して待つのはなかなか難しいように思われます。もっと自然な形でいのちの終わりを子どもに伝える方法はないでしょうか。

そのようなことを考えていたときに会ったのが、ドイツの絵本^{まづ}『はちみつ色くんといし色おじさん』（筆者訳）でした。主人公の僕は、いつも一緒に遊んでくれる大好きな親戚のおじさんが病気になり、もうすぐ死ぬと知らされます。「死ってなあに?」「死んだらどうなるの?」と尋ね、もはやおじさんには会えなくなり、壊れたおもちゃのように動けなくなることをなんとか理解します。そして、おじさんが亡くなった後、天国での再会の希望を抱きつつ、おじさんとの楽しかった遊びを思い出す、というお話です。この絵本の登場人物は、楕円、四角などの抽象形で表現され、顔はなく、単純な線で動きや感情を表し

ています。また、主人公の僕は「蜂蜜色」、おじさんは「石灰岩色」、その他、青空色、芝生色、深紅色など、各々の色がもつイメージを使って、人物が豊かに描かれています。

このように多彩な色とシンプルな形を用いた絵本でドイツでは子どもに死を教えていることに私は驚かされました。確かに、抽象的に表現されていても、子どもは、読むときの情緒的な状況に応じてイメージを膨らませ、言葉を超えて理解していくのでしょう。死を子どもに教えるとき、絵本を読み聞かせて、話しあうのはとてもよい方法だと気づかされました。

絵本に描かれている死

では、日本の絵本ではどのように死を表現しているのでしょうか。

登場人物はたいいていの場合、動物などを擬人化して語られることが多いです。それは、

子どもが絵に敏感に反応し、また影響を受けやすいことから、人の顔と比べ、より表情の少ない動物を主人公にすることで、子どもが自由に想像力を働かせ、感情を吐露できるように配慮されているからだと考えられます。

死の表現としては、葬儀、埋葬、お墓を描写することで、主人公の死を表しています。あるいは、挿絵では死について何も描かず、これまで登場していた人物や動物が、ページをめくると存在しないことで表されていることもあります。最近の絵本では、ユーモラスなお化けや天使の姿で死者が語るような場面もあります。

描写の方法として、死と共に、別離の悲しみ、その喪失の悲しみからの立ち直りの過程をあわせて表現されていることが多いです。また、死を描く前に、病氣、衰弱した様子、老いなどを描くことによって、死に向かっていることを自然に導いている場合もあります。

どの絵本にも共通しているのは、死を怖がらせるような表現や、痛みを感じさせるような描写はなく、温かな視点で描かれ、いのちの尊さを感じさせる終わりへと、明るい希望を予感させる結びの言葉で書かれていることです。このように子どもに不安感や恐怖を与えないように配慮された絵本を用いれば、子どもに優しく死を教えることができるようになります。

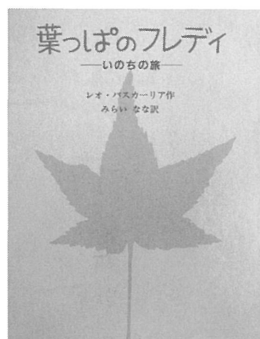
絵本の選び方

ハンガリーの心理学者マリア・ナギーによると、三歳から十歳までの子どもの死生観についての研究^{（註）}によると、三歳から五歳までの子どもは、死を取り返しのつかない現象としては捉えることができず、死んだペットと、電池切れで動かなくなったおもちゃとを同じような感覚で受けとめるそうです。五歳から九歳頃になると、一度死んだらもう決して生き

返ることはないという認識は出てきますが、まだ、自分の身近な人が亡くなる、すべての人に死が降り掛かるものだと、認められないようです。十歳を過ぎる頃になると、ようやく死についての概念を理解できるようになるそうです。このように子どもの死についての認識は年齢によって異なるので、理解に応じた絵本選びが必要でしょう。

幼児の日常生活は、自然とのふれあい、動植物などのかかわりが深いため、いのちの存在を知る機会に満ちています。自然は、季節と共に変化し、姿や形を変えていきます。そのいのちが生まれ、育ち、変化していくさまを味わいながら、いつか終わりが来ることを、大人は視野に入れてしっかりと、子どもたちに絵本を通じて伝えてほしいと思います。今の季節、外には葉をすっかり落とし、まるで眠っているかのように見える木々があります。絵本『葉っぱのフレディ』（レオ・バスカ

ーリア作 みらいなな訳 童話屋 一九九八年）と一緒に読みながら、死について話すのよい機会ではないでしょうか。今生きていることの素晴らしさ、いのちの大切さを感じられることでしょう。



注

- 1 アルフォンス・デーケン『死とどう向き合うか』NHK出版 二〇一一年 p. 238
- 2 Heinrichsdorf, P. (1995). Honiggelb und Steingrau, Gerstenberg Verlag.
- 3 Nagy, M. (1948). The child's theories concerning death. Journal of genetic Psychology, 73. 3-27